２０２４年１月２１日　青戸教会　「カナの婚礼」
聖書　出エジプト記３３章１２～２３節、ヨハネ福音書２章１～１１節、高橋克樹牧師

ガリラヤ地方のカナで行われた結婚式にイエスの家族に加えて、イエスの弟子たちも招かれていたのでした。当時の婚礼の披露宴は1週間も続いたようです。新郎新婦と関わりのある人たちが招かれて、1週間も盛大に開かれたようです。イエスの母マリアも招かれているので、マリアと親戚関係にあった人の披露宴であったのかもしれませんし、イエスの弟子であるナタナエルと関係があったかもしれません。ナタナエルはガリラヤのカナの出身である(ヨハネ福音書２１章２節参照)とヨハネ福音書に書いてあるからです。

いずれにせよ、イエスの母マリアは披露宴の裏方で手伝っていたようです。一週間も続く披露宴がどの程度の日数が立っていたのか、聖書を読む限りではわかりませんが、披露宴に提供する葡萄酒が足りなくなったことに母マリアが気づきます。そこで、マリアは自分の息子の中でいつも頼りにしているイエスに向かって『ぶどう酒がなくなりました』と言ったのです。すると、イエスは『婦人よ、わたしとどんなかかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません』と言ったのでした。

「わたしの時」というのは、イエス・キリストの生涯にとって重要な時のことで、通常は十字架の出来事を指します。ヨハネ福音書によると、このカナの婚礼での葡萄酒の不足という出来事が起こったのは、まだイエスが弟子たちを召して公の活動を始めたばかりの時です。ですから、「わたしの時はまだ来ていません」というイエスの言葉を聞いても、弟子たちも、イエスの家族も誰も、この言葉の意味など理解できるはずもありません。

ところが母アリアは召使いたちに言います。『この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください』と言うのです。このマリアの言葉にはイエスに信頼する者の意志が見て取れます。ルカ福音書で受胎告知の際に「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように」と言った姿勢に通じている言葉です。マリアのイエスに対する信頼を表す言葉ですが、まだ、この時イエスが水がめに満たした水をぶどう酒に変える奇跡を行うことなど想像さえしていないのです。おそらくは、イエスの弟子たちがこれからのち、イエスに従っていく上での信頼を母マリアのこの言葉は先取りしているのでしょう。

さて、この披露宴の裏方の近くに6つの水がめが置いてあったのです。いずれも2メトレテスないし3メトレテスの容量の水がめだとあります。1メトレテスは約３９リットルですから、少なくとも、全部で４８０リットルから７００リットルぐらいあったはずです。これらの水がめに水を汲んでくるだけで大変な労力だったはずです。２００リットルのドラム缶で換算すると2本から3本程度です。これらの水がめは普段、清めの水を入れる水がめでした。当時は律法に従って外出してから家に入る前に手や足を洗うために用いた水がめです。外出すると、汚れた人とすれ違ったりする可能性がありますから、外出から帰宅すると、しっかり手足を洗っていたのです。

つまり、清めの水というのは、他の人は汚れているかもしれないけれども、自分を汚れから守るためのものであり、人と人とを分離するものだったのです。イエスがぶどう酒に変えた水は、そのような役割を果たす水だったのです。

イエスは当時ユダヤ地域で差別されていた異邦人、収税人、心身に障害を持っている人たちと積極的に関わりをもって、社会に張り巡らされていた人と人を隔てる壁をなくして、いろいろな人間同士が神の支配するこの世で共に生きてく世界を実現させていくことが神の御心だと受け止めて活動しました。そのようなイエスの公の生涯がこれから展開されていくという、宣教活動の

最初の部分でカナの婚礼の奇跡が起こったのです。つまり、水がぶどう酒に変えられる奇跡はイエスの、この後の公生涯の活動を象徴している出来事なのです。

このように見てくると、母マリアのイエスに対する信頼、水がぶどう酒に変えられる奇跡的出来事に象徴されているのは、イエスが目指した神の国の到来をカナでの奇跡物語が先取りしていることに気づかされます。

しかも、婚礼は天の御国での祝宴を象徴しています。ヨハネ黙示録では天の御国の祝宴の描写が小羊の婚宴として描かれています（ヨハネ黙示録１９章６～９節）。花婿はキリスト、花嫁は信者たちなのです。この喜びの祝宴をもたらすために、神の小羊であるキリストは、世の罪を取り除く神の小羊として十字架にかからなければならなかったというのです。

旧約聖書ではメシアが到来したときには、ぶどう酒が豊かに流れる時として位置づけられています（アモス書９章１３～１４節）。また、マタイ福音書では、イエスがご自分を花婿にたとえて（マタイ福音書２２章１～１４節）、天の国は、ある王が王子のために婚宴を催したのに似ている、とたとえ話を語り始めて、この婚礼に招かれている人が自分の用事を理由に出席を断っていることに王は怒って、軍隊を送って出席を断った人たちを滅ぼしたとあります。このように、婚礼の席は神の御国を象徴しているのですが、その婚礼の席で招待客に提供するぶどう酒が足りなったという非常事態が起こったのです。その非情事態をイエスが人々を隔てる象徴である清めの水をぶどう酒に変える奇跡を行うことで、神の御国の祝宴を無事に全うさせたというのが、このカナの婚礼の出来事なのです。

以前、神奈川教区のある教会で、主任牧師が病気か何かで不在で、引退した牧師が急きよ、洗礼式を執り行うことになったのです。その時に、ハプニングが起こりました。というのは、洗礼式を行うときに、洗礼用の水が用意されていなかったのです。けれども、その隠退牧師は水なしで洗礼式を行ったのです。のちに、この洗礼が認められるか否かが問題になりました。結論を言うと、認められないことになりました。隠退牧師が洗礼式をしたからではありません。また、その教会の主任牧師が洗礼式をしていなかったからでもありません。エレメントである水がなかったからです。

洗礼はイエスの時代から水なしで行われたことはありません。私たちの日本キリスト教団ではバプテスト派の流れをくむ教会以外は、水に浸した手を頭に置く滴礼で行います。イエス時代の洗礼は、流れる水の中で行われたようです。つまり、川の流れの中で全身を沈めるのです。水は罪を洗い流す意味合いが基本的にあるのですが、水なしに洗礼は成り立たないと考えるわけです。

イエスは水をぶどう酒に変える奇跡を行いました。その際に用いられた水は清めの水であり、人々を分け隔てる水でありました。そのような隔ての水を祝宴のぶどう酒に変えて、神の御国を象徴する祝宴を続行させる業を成し遂げました。先の水なしの洗礼は水というエレメントがないために、この世の罪を取り除く神の小羊イエスの名による新生の出来事になりませんでした。

水がぶどう酒に変えられることは、この世の現象としてはありえないことです。けれども、人と人を分け隔てする水を、御国の祝宴に招かれていることを象徴するぶどう酒に変えられたということが、イエスによって行われたという理解をすること、この奇跡の出来事の意味が明確になってくるのです。

私たちの人生にカナの婚礼で起こった奇跡があるとしたら、それはイエスの名のよる洗礼を受けたことです。そこに私たちの信仰における奇跡の出来事があるのです。